

二十世紀ドイツにおける聖なるものの共同体論について
—シェーラーとフォン・ヒルデブラントにおける宗教現象学の視点から—

横山 陸（日本学術振興会特別研究員）

「宗教とは何か」そして「何であったのか」という問いは、二十世紀はじめのドイツにおいて繰り返し問われた問いである。その背景にあるのは、前世紀末の急速な近代化と世俗化であった。トレルチ、ウェーバー、ジンメルらの宗教社会学とならんで、当時盛んであったのは「聖なるもの」をめぐる議論である。なかでもルドルフ・オットーの『聖なるもの』（1917年）はグスタフ・メンシング、ファン・デル・レーウ、エリアーデらに影響を与え、今日でも宗教哲学および宗教現象学における参照点であり続けている。本発表はシェーラーとフォン・ヒルデブラントの宗教現象学の視点から、この「聖なるもの」をめぐる議論の再考を試みたい。オットーが新カント派のフリースの「宗教的アприオリ」を受容したうえで、自らの「聖なるもの」の概念を展開しているのに対して、ほぼ同時期にシェーラーは新カント派のヴィンデルバントの「聖価値」を現象学的アприオリズムと結びつけることによって、自らの価値倫理学のなかに「聖なるもの」を位置づけている。さらにシェーラーは『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』（1913/16年）において、この宗教的な聖性という観点から共同体論を構想しており、それはフォン・ヒルデブラントの『共同体の形而上学』（1930年）において具体的に展開された。当時の宗教哲学・社会学における論者のほとんどがプロテスタントであったなかで、カトリシズムの立場に依拠するシェーラーとフォン・ヒルデブラントの議論の特色のひとつは、この共同体論に見いだせるだろう。

近年、英米哲学における共同行為論や社会実在論の文脈から、ハイデガー以前の初期現象学者たちによる集合的な志向性をめぐる議論が再評価されている¹。こうした動向のなかで、シェーラーとフォン・ヒルデブラントの共同体論も読み直され始めているが、その際には議論の根

¹ たとえば Alessandro Salice, Bernhard Schmid (ed.), *The Phenomenological Approach to Social Reality: History, Concepts, Problems*, Springer, Switzerland 2016 など。

2018年5月16日発行

底にあった宗教的な聖性という観点は見落とされがちである²。これに対して本稿は、シェーラーとフォン・ヒルデブラントの共同体論を「聖なるものの共同体」論として読み直すことを通じて、「聖なるもの」をめぐる議論の再考を試みたい。具体的には、まず、シェーラーがヴィンデルバントの「聖価値」を受容することによって、集合的な人格としての「総体的人格」概念を構想していることを明らかにする。つぎに、この「総体的人格」を共同行為の領域として特徴づけるために、現象学者ライナッハの法的な共同行為論をシェーラーが宗教的な愛の共同行為論として読み直していることを示す。最後に、シェーラーによってこうした素描された「聖なるものの共同体」論が、フォン・ヒルデブラントによって具体的に展開された点を確認する。

² たとえば Alessandro Salice, “Shared Emotion: A Schelerian Approach”, in: *Thaumazein: Rivista di Filosofia* 3, Verona 2015, S. 83-102. Angelika Krebs, *Zwischen Ich und Du: Eine dialogische Philosophie der Liebe*, Suhrkamp, Berlin 2015.